感情イメージの研究 (Ⅳ)

—対象による違いと性による違い—

上杉　喬

Research on the Affective Aspect of Imagery (4th report)

—Differences of Images between Objects and between Sexes —

Takashi Uesugi

This is the 4th report of successive studies on the affective aspect of imagery. In this study a special questinoaire named QIAI (Questionaire for the inquiry of affective imagery) was used the same as in the former studies (Uesugi, T., 1981, 1983, 1984). The QIAI is a list of paired words with a rating scale. The left word of earch pair is the "object word" (32); self, father, mother, family, social, and so on. The right is the "affective word" (8); joy, hoope, love, astonishment, sorrow, fear, anger and disgust.

Subjects were 359 male and 559 female students in the Bunkyo University.

The result of the factor analysis concerning every object word suggested that there are conciderable differences for the degree of the positive and negative feeling of 8 affective words toward a specific object. For example, astonishment toward the art represents some positive feeling, but toward the friend represents some negative feeling. And differencies of affective images between sexes were also showed. Astonishment toward the pleasure in man reprensent his positive feeling, on the other hand in woman her negative feeling to it.

はじめに

われわれは，観察可能な行動を通して，その行動をもたらした心理活動を研究し，心理活動の法則を明らかにすることができるが，心理活動の結果が全て観察可能な行動として表われるものでないこともまた実事である．観察可能な行動に代えて生理的変化をとらえ心理活動の理解を深めることも可能であるが，現在のところ，生理的変化に対応する心理活

動のレベルは，大雑把なもので，意識の具体的内容にまで迫ることには大変に距離がある．

ところで，人間の心理学にとって，生理的変化や行動的変化としてあらわれる心理活動の大法則は，もちろん重要ではあるが，そこに終るならば十分とはいえない．具体的かつ現実的生活の中での心理活動を理解することなしに，意識的存在としての人間の心理学とは言えないからである．われわれは，自己の意識内容の表出を可能にする言語を持っている．ここに，生理や行動に表われない心理活動を探究する可能性を見ることができる．

ところで，われわれが，意識の内容を言語的にあらわす時に意識されるものは心理活動そのものではない．われわれが意識するものは，心理活動の結果としてのイメージである．たとえば，心理活動としての推理．推論において，われわれは，推理・推論活動そのものを意識することはできない．推理・推論活動の結果としてあらわれるもの，すなわち，イメージとそのイメージの変化を意識するのである．このことは，心理活動の理解においてイメージの重要性を示している．

イメージは一般に心の中の絵のようなものとして理解され意識されることが多い．直観像，入眠時イメージ，白日夢，夢など視覚的なものとして意識されるものがそれである．しかし，イメージは視覚的なものに限られるものではない．たとえば，あるメロディーが頭の中でくり返し流れ，止まらないなどの経験は聴覚的イメージの例である．イメージを詳しく自己観察（内省）すると，嗅覚的なもの，触覚的なものなどもあり，イメージが諸種の感覚・知覚モダリティーに対応して意識されることが分る．さらに，イメージは，感覚・知覚的モダリティーばかりでなく，本研究で扱う感情的質をもったもの（感情イメージ）としても意識される．

イメージ研究において，知覚と知覚イメージは，知覚が知覚対象が現前する時に意識されるものであるのに対し，知覚イメージは，知覚対象が直接現前しない時に意識されるものとして区別される．この区別は，感情と感情イメージに関しても適用される．すなわち，感情は感情を喚起する対象が現前する時に意識されるものであり，感情イメージは，対象を想起（イメージ）したり，対象に関し想念をめぐらせたりした時に意識されるものである．

本研究における感情イメージ調査法においては，対象を指示する語（対象語）を提示し，対象をイメージさせ，同時に，感情語を提示し感情語によって想起（イメージ）された感情イメージとが，直観的に〝ぴったり〟であるかどうかを，＜近い―遠い＞の次元で評定するという手続をとる．その意味では　対象イメージと感情イメージの照合を通して〝ぴったりさ〟を直観的に評定するもので，この照合の基礎に，言語の意味場を仮定するものである．

ところで，全く当然のことであるが，感情が具体的実際に現前する対象や事象により喚起されるとする前提は，その喚起された感情が個別具体的で特殊なものであることを意味している．感情イメージもまた，想起（イメージ）する対象や事象が，例えば「今朝，食事中にひじをついて食べているのを大声で叱った父」などであれば，感情イメージもまた個別具体的特殊なものとなる．本研究における対象や事象は，これとは違い，より一般的全体的なものである．その意味では，本研究において想起される感情イメージは，より抽象的概括的なものであり，むしろ日常体験を通して，対象や事象の感情的意味として慣化され，比較的自動的にイメージとして浮かびやすいものとなっている〝基底的感情イメージ〟であると考えられる．

方　　法

1　感情イメージ調査表

本研究では，上杉（1979）の開発したイメージ調査法に従って，学生生活に関連の深い32の対象語と８つの感情語を組み合わせた感情イメージ調査表を使用した．イメージ調査

表 1　感情語と対象語

(感情語　8)							
喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
(対象語　32)							
集団	友人	恋人	家族	学校		病気	
仲間	生活	夫	兄弟	芸術		死	
社会	遊び	健康	姉妹	文化			
近隣	生	父	勉強	趣味			
親類	私	母	仕事	自然			
人類	妻	家庭	職場	旅			

表 2　感情イメージ調査表（その一部）

	近い	やや近い	どちらともいえない	やや遠い	遠い
1．私 ── 嫌					
2．芸術 ── 恐					
3．死 ── 驚					
4．父 ── 愛					

法は感情イメージの測定のために開発したもので，感情研究としてのＳＤ法と創造性開発技法としてのＫＪ法（川喜多二郎，1965）からヒントを得たものである．具体的には，表1に示す8感情語と32対象語を組み合わせ，表2のように，対象語（ex. 私，父，母など）と感情語（ex. 喜，愛，悲など）を対にして示し，対象語の指示する「対象」（各人の体験を通してイメージとして存在している対象）をイメージに浮かべてもらい，その「対象」のイメージと，感情語からイメージされる感情イメージの<近さ―遠さ>を，5段階で主観的に評定してもらうものである．本研究の感情イメージ調査における教示は，次の通りである．

次のページから，全部で3ページにわたって，1～256のことばの対があります．左側はいろいろな対象や事象をあらわしていることばです．左側のことばは，感情語です．

各対について，左側の対象や事象を具体的にイメージしたとき，あなたにとって右側の感情が，「近いもの」であるか，「遠いもの」であるか，そのぴったりするところに○印をつけて下さい．

なお，イメージ調査法は，現在まで，対象語については，「労働場面をあらわす対象語」（ex. 昇給，昇格，賞与，社長など）によるもの（上杉，1983），また「色彩語」（ex. 赤，青，黄など）によるもの（上杉，未発表）などが試みられているが，感情語に代えて，欲求語（ex. 安全欲求，親和欲求，達成欲求など）や実存語（ex. 自由，成長，甘えなど）などにも応用可能なものである（上杉，1981）．

2　対象者・実施時期

文教大学人間科学部1年生．1982年から1989年の8年間にわたって，毎年4月末～5月初旬に，統計学の授業時間中に1年生を対象に実施．表3に示すように，男395名，女559名，計954名を対象とした．

表 3　本研究の対象者

	性		年齢				
年度	男	女	18歳	19	20以上	不明	計
'82	56	69	29	65	30	1	125
83	54	70	75	40	9		124
84	64	79	88	43	12		143
86	74	78	93	42	17		152
87	44	92	77	51	8		136
88	43	89	84	36	10	2	132
89	60	82	79	50	13		142
計	395	559	525	327	99	3	954

研究Ⅰ　感情イメージの対象による違い

1　目　　的

本研究で用いられた8つの感情語は，Plutchik（1960）による8つの基礎感情をもとにして，一部修正（Plutchikのacceptance受容にかえて愛とした）し，感情を1字で簡潔にあらわしたものである．この8つの感情は，諸対象に共通する一般的な感情構造としては，これまでの因子分析的研究において，いずれも，

a.　喜・望・愛

b. 驚

c. 悲・恐・怒・嫌

の3つにグルーピングでき，それぞれ，"a. 強いプラス（またはポジティブ）感情"，"b. マイナス寄りの中性感情"，"c. 強いマイナス（ネガティブ）感情" として特徴づけられることが示された（上杉，1981，1983，1986）.

しかし，8つの感情が対象に対して示す，"プラスv.s. マイナス感情" は，個々の具体的な対象に対しては，必ずしも同じ意味（強さのレベル）をもつものでないこともまた，示唆されていた．本研究Ⅰでは，このような，対象による感情イメージの違いをまず検討するものである．

2 手　　続

(1) 8感情の諸対象に対する一般的な因子構造をとらえるために，SD法に従って，各感情語間で，対象32×被験者954＝30,528についての相関行列を求め，主因子解およびバリマックス解（固有値1.0以上を基準）を求めた．

(2) 次に，対象語ごとに，各感情語間で，被験者954についての相関行列を求め，主因子解を求めた．

3 結　　果

(1) 32の対象に共通する，8感情の因子構造は表4に示すものであった．ここでは，固有値1.0以上を基準とする累積寄与率は63.6％であった．

(2) 32の対象毎の8感情についての主因子解の結果は，対象が「自然」の場合を除いて，他の31対象では，いずれも第1因子が "プラスv.s.マイナス感情" をあらわすものであった（「自然」では第2因子が，"プラスv.s.マイナス感情" 軸）．表5に，因子負荷量を示した．

4 考　　察

(1) 表4に示された，諸対象に共通する8感情の因子構造は，上杉（1981，1983，1986）の従来の結果と同様に，8つの感情が，"強いプラス感情（喜・望・愛）"，"マイナス寄りの中性感情（驚）"，"強いマイナス感情（悲・恐・怒・嫌）" をあらわすものであり，特に主因子解第1因子の因子負荷量に，"プラスv.s. マイナス感情" の強さの程度が示されていると考えることができる．すなわち，8感情の中では，"嫌" が最も強いマイナス（ネガティブな）感情をあらわし，"恐・悲" がそれにつづく強いマイナス感情で，強いマイナス感情の中では，"怒" が相対的にマイナス（ネガティブ）の強さの弱いことが示されている．反対に，最も強いプラス（ポジティブな）感情を示すのが "喜" であり，"望" や "愛" は相対的におだやかなプラス感情を示すものである．"驚" は一般的には，どちらかというとマイナス感情を意味するが，"マイナスvs. プラス感情" の軸に一義的に結びつかない感情であると思われる．これらの結果は，より具体的に言うと，ある対象（ex.私）に対

表4　8感情の因子構造

	全体 N=954				男 N=395				女 N=559			
	主因子解		バリマックス解		主因子解		バリマックス解		主因子解		バリマックス解	
	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子
1 喜	−.76	−.42	.85	−.19	−.76	.42	.85	−.18	−.77	.42	.85	−.19
2 望	−.67	.49	.83	−.08	−.68	.47	.82	−.10	−.67	.51	.84	−.07
3 愛	−.63	.41	.74	−.11	−.63	.41	.74	−.10	−.63	.41	.74	−.11
4 驚	.16	.73	.36	.65	.16	.73	.36	.65	.16	.72	.37	.65
5 悲	.70	.35	−.30	.73	.70	.35	−.30	.73	.70	.34	−.30	.73
6 恐	.70	.42	−.25	.78	.69	.40	−.25	.76	.71	.43	−.25	.79
7 怒	.63	.42	−.20	.73	.64	.41	−.21	.73	.62	.42	−.18	.73
8 嫌	.82	−.00	−.61	.54	.81	−.01	−.62	.53	.82	−.00	−.61	.55

表5　対象ごとの主因子解第1因子の因子負荷量

	全体 N=954								男 N=395								女 N=559							
対象	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
生活	58	37	50	−14	−78	−69	−69	−76	58	37	57	−16	−77	−66	−69	−73	58	36	44	−15	−79	−71	−70	−77
仲間	69	62	66	−14	−66	−66	−65	−80	73	64	72	−15	−66	−64	−70	−81	65	61	62	−14	−66	−68	−62	−81
友人	59	52	39	−42	−68	−71	−68	−74	63	61	36	−42	−66	−77	−66	−75	55	45	42	−42	−69	−68	−69	−75
生	77	71	62	0	−60	47	−55	−75	74	69	59	−4	−65	−51	−55	−76	79	73	64	3	−56	−45	−55	−73
人類	56	50	54	−23	−70	−65	−68	−77	63	60	59	−18	−68	−64	−63	−79	47	38	46	−30	−73	−70	−74	−76
親類	56	48	63	−55	−64	−72	−76	−82	59	52	62	−52	−58	−70	−74	−81	53	45	65	−56	−67	−73	−77	−84
集団	59	56	55	−43	−71	−74	−72	−81	62	65	56	−35	−75	−69	−72	80	56	48	54	−49	−69	−77	−72	−81
私	71	61	52	−9	−67	−64	−59	−74	66	56	50	−17	−73	−70	−66	71	74	66	55	−1	−62	−59	−52	−76
近隣	48	40	55	−25	−67	−68	−79	−79	52	43	52	−23	−68	−63	−79	−78	45	37	57	−26	−68	−72	−79	80
社会	48	36	49	−33	−74	−71	−71	−77	47	45	54	−27	−73	−69	−69	−79	48	29	46	−37	−75	−72	−73	−75
妻	29	23	43	−51	−73	−69	−76	−78	32	32	48	50	−76	−64	−77	−80	27	17	39	−54	−71	−74	−76	−76
夫	39	37	40	−53	−80	−70	−77	−83	24	16	24	−55	−84	−70	−78	−84	44	46	47	−52	−77	−72	−76	−83
恋人	58	51	57	−24	−59	−69	−60	−73	58	54	63	−26	−60	−69	−61	−76	57	48	53	−22	−59	−70	−60	−72
健康	63	39	30	−36	−67	−64	−51	−55	65	47	32	−28	−70	−65	−55	−57	58	26	22	−46	−66	−64	−50	−53
家庭	76	56	73	−35	−73	−70	−79	−85	77	53	70	−47	−73	−68	−77	−83	76	57	76	−27	−73	−71	−80	−86
家族	76	66	76	−18	−76	−70	−68	−84	74	63	73	−27	−78	−65	−68	−83	77	68	78	−12	−74	−73	−69	−84
母	73	60	74	−17	−50	−55	−65	−78	72	59	71	−11	−44	−54	−62	−76	74	61	76	−20	−53	−57	−67	−78
兄弟	67	55	72	−26	−67	−61	−67	−81	68	52	69	−28	−70	−66	−66	−82	67	59	74	−24	−64	−57	−67	−80
姉妹	62	49	69	−34	−68	−75	−70	−77	53	38	59	−46	−71	−78	−75	−75	64	52	72	−29	−67	−74	−67	−78
父	76	65	73	−5	−46	−35	−60	−82	77	70	73	0	−49	−16	−55	−80	76	62	73	−8	−44	−46	−63	−82
職場	58	46	50	−21	−75	−64	−65	−78	60	49	56	−18	−74	−67	−64	−76	57	44	45	−24	−76	−63	−66	−80
仕事	58	50	39	−24	−75	−69	−70	−76	61	48	47	−27	−72	−66	−71	−77	53	48	32	−26	−77	−72	−70	−75
学校	69	65	60	−22	−77	−72	−61	−76	65	68	58	−25	−74	−73	−66	−73	72	64	61	−20	−79	−72	−57	−78
勉強	73	63	51	15	−69	−66	−56	−76	73	64	54	11	−64	−66	−56	−75	71	61	47	10	−72	−67	−55	−77
遊び	66	60	38	0	−71	−70	−69	−72	64	60	42	15	−68	−67	−72	−70	69	60	36	10	−73	−72	−66	−73
趣味	71	49	27	−7	−74	−71	−75	−73	74	49	38	−5	−78	−74	−76	−73	67	49	16	−11	−71	−66	−74	−73
文化	55	48	48	−4	−67	−60	−63	−72	69	57	55	19	−61	−47	−53	−71	37	37	37	−24	−72	−71	−70	−71
旅	71	63	47	28	−48	−49	−61	−75	65	60	46	28	−54	−55	−67	−73	74	65	48	−27	−43	−44	−56	−76
自然	71	70	63	10	−34	−23	−25	−58	77	71	65	7	−29	−17	−11	−56	65	69	60	12	−38	−29	−37	−61
芸術	74	73	64	17	−34	−54	−33	−75	77	74	68	20	−29	−52	−27	−76	71	72	59	14	−36	−57	−35	−74
病気	64	54	19	−25	−61	−68	−42	−68	70	61	34	−20	−53	−64	−45	−70	56	45	4	−29	−68	−72	−42	−67
死	70	71	42	−40	−68	−67	−36	−77	66	73	43	−45	−73	−67	−36	−74	72	70	42	−37	−64	−66	−38	−80
全体	76	67	63	−16	−70	−70	−63	−82	76	68	63	−16	−70	−69	−64	−81	77	67	63	−16	−70	−71	−62	−82

して，"嫌"のイメージが<近いもの>とされる場合，その対象（ex. 私）に強いマイナス（ネガティブな）感情を抱いており，反対に"喜"が<近いもの>であるなら，その対象（ex. 私）に強いプラス（ポジティブな）感情を抱いているということを示すものである．

(2)　ところで，これらの8感情の示す"プラスv.s.マイナス感情"の強さは，諸対象に対していつも一定（安定）しているものなのであろうか．このことを検討しようとしたのが，表5に示す，対象ごとの"プラスv.s.マイナス感情"をあらわす因子の因子負荷量で，結果は，対象によって，8つの感情の"プラスv.s.マイナス感情"軸での因子負荷量が，相対的ではあっても，さまざまに変化することを示すものであった．

(3)　諸対象に共通の一般的感情として，最

も強いマイナス（ネガティブな）感情を示すものは〝嫌〟であったが，対象ごとに見た場合でも，32の対象のうちで，29の対象において高い負の因子負荷量を示し，〝嫌〟が＜近いもの＞とイメージされた場合には，ほとんどの対象に対して，強いマイナス感情を示すものであることがわかる．このことは，〝嫌〟という感情の強いマイナス感情としての安定性を示すものである．しかし，〝嫌〟もまた，対象によって，〝マイナス（ネガティブな）感情〟の強さを変化させることも示されている．すなわち，対象が「健康」「自然」の場合には，相対的に因子負荷量の絶対値が小（−0.55と−0.58）となっている．このことは，「健康」「自然」に対して〝嫌〟が＜近いもの＞としてイメージされたからといって，「健康」「自然」に対して強いマイナス（ネガティブな）感情を抱いていると一義的には言えないことを意味している．「健康」に対する最も強いマイナス感情は〝悲〟で〝恐〟がそれにつづいている．「健康」の場合には，〝嫌〟よりも〝悲〟や〝恐〟を＜近いもの＞とイメージする場合に最も強いマイナス感情を抱いていることがわかる．

(4) 諸対象に対する一般的感情として，〝嫌〟につづいて強いマイナス感情を示すものは，〝悲〟と〝恐〟および〝怒〟であった．対象別に見た場合，−0.50以下のかなり高い負の因子負荷量を示すものは，いずれも，32対象中28であり〝悲〟と〝恐〟，それに〝怒〟が，かなり強いマイナス感情としての安定性を示すものであることがわかる．しかし，また，〝悲・恐・怒〟が対象によっては，〝マイナス感情〟の強さを変化させることも示されている．すなわち，〝悲〟では，「父」「芸術」「自然」「旅」に対する負の因子負荷量が−0.50より小で，これらの対象に対する〝悲〟のイメージが，必ずしも強いマイナス感情を示すものではないことがわかる．特に，「芸術」と「自然」に対して〝悲〟を＜近いもの＞とイメージした場合，「芸術」や「自然」にネガティブな感情を抱いていても，それは，強いマイナス感情を意味しない．

また，〝恐〟では，特に「父」と「自然」に対する負の因子負荷量が小である．「父」に〝恐〟をイメージしたとしても，それは，強いマイナス感情ではなく，「自然」に対する〝恐〟の感情も，ポジティブな感情ではないとしても，それほどネガティブな感情を抱いているものでもない．

さらに，〝怒〟の感情では，特に「芸術」「自然」および「死」に対する負の因子負荷量が小で，これらの対象・事象に対する〝怒〟の感情もまた，同様に，それほどネガティブな感情を示すものではないことがわかる．

(5) 諸対象に共通する一般的感情において，〝驚〟は，他の7感情とは違がって，一義的に〝プラスv.s.マイナス感情〟軸に結びつかないものであった．このことは，表5から，対象によって，プラス感情を意味したり，またマイナス感情を意味したりすることによって示されている．対象が「集団」「親類」「妻」「夫」「友人」「死」などの場合，因子負荷量は−0.40より小で，これらの対象に対し〝驚〟を＜近いもの＞とイメージする場合には，これらの対象にかなりの程度のマイナス感情を抱いていることになる．これらとは対照的なのが，「芸術」「勉強」「自然」「旅」に対する〝驚〟の感情である．この場合には，〝驚〟は，強くはないとしても，対象に対するプラス（ポジティブな）感情を意味していることになる．

(6) 〝喜・望・愛〟は一般的に対象に対するプラス（ポジティブな）感情をあらわすものであった．これらの感情もまた，対象によって，強いプラス感情からかなり弱いプラス感情にわたって変化することが表5から知ることができる．

〝喜〟では，因子負荷量が0.50以上の対象が，32のうち28を占め，〝喜〟がかなり安定してかなり強いプラス感情としての意味をもつことがわかる．しかし，対象が「妻」「夫」の場合には，〝喜〟が＜近いもの＞としてイメージされても，弱いプラス感情の意味しか

もたず，他の対象のように強いプラス感情を示していないことがわかる．

〝望〟では，因子負荷量が0.50以上の対象は21であった．また，〝喜〟に比べ32対象の全てに対し因子負荷量が小であった．このことは，〝望〟という感情が〝喜〟に比べ，相対的に低いプラス（ポジティブな）感情をあらわすものであることがわかる．〝望〟のプラス感情としての意味の弱い対象は，「社会」「生活」「妻」「夫」「健康」などであった．

最後に，〝愛〟について見ると，〝愛〟もまた対象によって感情的意味に違いのあることがわかる．〝愛〟は一般的には，〝喜〟や〝望〟に比べて相対的にプラス（ポジティブな）感情としての強さは低いものであったが，対象が「近隣」「親類」「妻」「夫」「家族」「母」「兄弟」「姉妹」の場合には，因子負荷量が〝喜・望〟よりも高く，また，「父」や「家族」でも〝喜〟に比肩しうる0.73の因子負荷量を示し，これら，いわゆる『家族・家庭』を構成する諸対象の場合，〝喜・望〟に比べ相対的に強いプラス感情としての意味を持つことが示された．また，〝愛〟が，強いプラス感情としての意味を持ちえない対象としては，「仕事」「友人」「趣味」「遊び」「健康」「病気」があげられる．

以上から，まとめてみると，①〝嫌・悲・恐・怒〟は諸対象に対し全体として，〝マイナス（ネガティブな）感情〟をあらわしており，②とくに〝嫌〟は，対象によるニュアンスのちがいはあるものの，全体として，強いマイナス感情をあらわし，③〝悲・恐・怒〟もまた多くの対象に対して強いマイナス感情をあらわすが，その強度は，いくつかの対象（「生活・趣味・健康」）を除いて〝嫌〟よりも相対的に低く，また対象によっては（「芸術・自然」など）弱いマイナス（ネガティブな）感情〟としてのものになり，④〝驚〟は対象によって，〝プラス（ポジティブな）感情〟となったり，反対に〝マイナス（ネガティブな）感情〟となったり変化し，⑤〝喜・望・愛〟は，諸対象に対し全体として〝プラス（ポジティブな）感情をあらわすが，対象によっては，必ずしも強いプラス感情ではなく，かなり弱いプラス感情としての意味になる，ことがわかる．

ここから，8感情によって，〝プラス v.s. マイナス感情〟の軸上の合成得点としての〝感情価〟の算出に当っては，8感情の諸対象に共通のウエイトづけではなく，対象別に〝プラス v.s. マイナス感情〟の強さの程度をあらわす因子の因子負荷量をウエイトづけとして用いることの必要性が示されている．

研究Ⅱ　感情イメージの性による違い

1．目　　的

研究Ⅰにおいて，8感情の〝プラス v.s. マイナス感情〟としての意味（強度）が，対象によって，さまざまな違いのあることが示されたが，研究Ⅱでは，男女による違いについて検討したいと思う．

2　手　　続

(1)　研究Ⅰと同様にして，男女別に，32対象に共通する8感情についての主因子解およびバリマックス解を求めた．

(2)　次に，対象ごとに，男女別に，8感情についての主因子解を求めた．

3　結　　果

(1)　男女別の32対象に共通する8感情につ

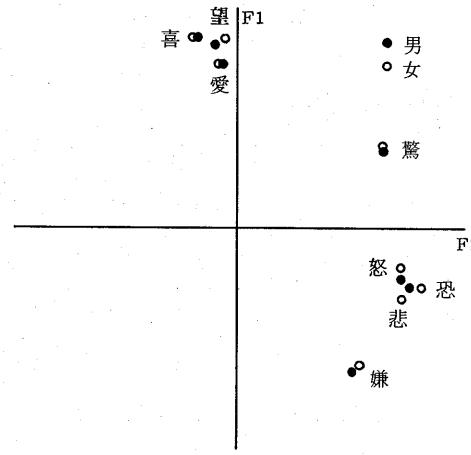

図1　感情語のプロット（バリマックス解）

いての主因子解およびバリマックス解の結果は表4の通りであり，図1はバリマックス解の第1因子を縦軸に第2因子を横軸にとった回転後の因子プロットを示したものである．表4および図1から分るように，32対象に共通の8感情の一般構造には男女の違いは全くないという結果となった．

(2) 男女別の32対象ごとに求めた8感情の主因子解の結果（〝プラスv.s.マイナス感情〟をあらわす因子の因子負荷量．「自然」では第2因子，他の31対象では第1因子）は表5に示される．対象によって，8感情の因子負荷量に，さまざまな程度の男女差の見られることがわかる．表6に，表5の因子負荷量の男女差を2組の独立な標本相関係数の有意性の検定とみなした結果（t値）を示す．

表6　因子負荷量の男女差の有意性の検定

対象	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
生活	0.00	0.17	2.66	−0.16	0.77	1.43	0.29	1.39
仲間	2.33	0.75	2.77	−0.15	0.00	1.08	−2.16	0.00
友人	1.87	3.40	−1.07	0.00	0.84	−2.90	0.84	0.00
生	−1.83	−1.22	−1.22	−1.06	−2.16	−1.18	0.00	−1.02
人類	3.51	4.44	2.73	1.93	1.51	1.65	3.17	−1.14
親類	1.33	1.39	−0.76	0.86	2.25	0.93	1.06	1.43
集団	1.40	3.83	0.43	2.59	−1.90	2.61	0.00	0.43
私	−2.39	−2.43	−1.05	−2.45	−3.09	−2.88	−3.28	1.65
近隣	1.39	1.08	−1.08	0.48	0.00	2.52	0.00	0.81
社会	−0.20	2.82	1.62	1.69	0.67	0.91	1.22	−1.49
妻	0.83	2.43	1.69	0.83	−1.65	2.92	−0.37	−1.55
夫	−3.45	−5.09	−4.02	−0.64	−3.05	0.61	−0.75	−0.50
恋人	0.23	1.23	2.29	−0.64	−0.23	0.29	−0.24	−1.34
健康	1.71	3.70	1.64	3.18	−1.13	−0.26	−1.05	−0.87
家庭	0.37	−0.87	−1.95	−3.54	0.00	0.88	1.19	1.60
家族	−1.06	−1.33	−1.77	−2.37	−1.44	2.33	0.29	0.50
母	−0.65	−0.47	−1.65	1.40	1.79	0.66	1.30	0.75
兄弟	0.28	−1.54	−1.55	−0.65	−1.65	−2.20	0.27	−0.88
姉妹	−2.55	−2.67	−3.49	−3.01	−1.16	−1.44	−2.46	1.10
父	0.37	.2.16	0.00	1.22	−0.97	5.09	1.87	0.88
職場	0.69	0.97	2.25	0.95	0.69	−1.05	0.53	1.55
仕事	1.80	0.00	2.71	−0.16	1.71	1.74	−0.30	−0.72
学校	−2.01	1.08	−0.70	−0.80	1.83	−0.32	−2.20	1.77
勉強	0.63	0.75	1.43	0.15	2.27	0.27	−0.22	0.72
遊び	−1.36	0.00	1.07	−3.81	1.51	1.47	−1.74	0.93
趣味	2.12	0.00	3.62	0.92	−2.40	−2.39	−0.69	0.00
文化	6.97	3.93	3.49	6.63	3.01	5.72	4.20	0.00
旅	−2.66	−1.25	−0.39	0.16	−2.19	−2.22	−2.70	1.02
自然	3.72	0.59	1.25	−0.77	1.54	1.92	4.21	1.15
芸術	2.02	0.65	2.30	0.94	1.19	1.08	1.34	−0.69
病気	3.56	3.40	4.76	1.45	3.62	2.27	−0.56	−0.86
死	−1.74	0.93	0.19	−1.46	−2.59	−0.27	0.35	2.25

注）2.58; P<0.01, 2.81; P<0.005, 3.35; P<0.001

(3) 表6から，まず，全体としてみると，1％水準で有意な男女差をもつ対象は，〝望〟と〝愛〟が最も多く9対象にのぼり，次いで，〝喜〟が7対象であった．また，〝驚〟，〝恐〟が6対象，〝悲〟と〝怒〟が5対象，〝嫌〟は1％の有意水準で男女差を示す対象はなかった．

(4) 以上を感情別に見ると，有意な男女差を示す対象の多い〝望〟では，因子負荷量が男＞女なのは，「人類.22（因子負荷量の男女差の絶対値．以下同じ）」「健康.21」「文化.20」「集団.17」「友人.16」「病気.16」「社会.16」でいずれも0.1％水準での有意差を示し，女＞男は，「夫.30」（0.1水準），および，「姉妹.14」（1％水準）であった．

また，〝愛〟では，男＞女なのは，「病気.30」「趣味.22」「文化.18」（以上0.1％の有意水準）および「仕事.15」「人類.13」「生活.13」「仲間.10」（以上1％水準）であり，女＞男は，「夫.23」および「姉妹.13」（いずれも0.1％水準で有意差）であった．

次に，〝喜〟では，男＞女は「文化.32」「人類.16」「病気.14」「自然.12」でいずれも0.1％の有意水準で差があり，女＞男は「夫.20」（1％水準），「私.08」（0.5％水準）および「旅.09」（1％水準）であった．

〝驚〟では，男＞女は「文化.43」（0.1％水準）「健康.18」（0.5％水準）および「集団.14」（1％水準）で，女＞男は「遊び.25」「家庭.20」が0.1％水準の有意差で，「姉妹.17」が0.5％水準の有意差を示した．

さらに，〝恐〟では，男＞女は「父.30」「文化.24」（以上0.1％水準），「妻.10」（0.5％水準）および「集団.08」（1％水準）であり，女＞男は「私.11」および「友人.09」でいずれも0.5％水準で有意差を示した．

そして，〝怒〟では，男＞女は「自然.26」「文化.17」「人類.11」（いずれも0.1％水準），女＞男は「私.14」（0.5％水準）および「旅.11」（1％水準）であり，最後に〝悲〟では，男＞女は「病気.15」および「文化.11」（い

ずれも0.5%水準）であり，女＞男は「私.11」「夫.07」（以上0.5%水準）と「死.07」（1%水準）であった．

(5) これを，対象別に見ると，「文化」が〝喜・望・愛・驚・悲・恐・怒〟の7感情において，「人類」が〝喜・望・愛〟と〝怒〟において，「病気」が〝喜・望・愛〟と〝悲〟において，「集団」が〝望〟，〝驚〟および〝恐〟において，「健康」が〝望〟と〝驚〟，「自然」が〝喜〟と〝怒〟において，いずれも有意に男＞女であり，反対に女＞男での有意差は，「夫が」〝喜・望・愛〟と〝悲〟に，「私」では〝喜〟と〝悲・恐・怒〟に，「姉妹」は〝望・愛〟と〝驚〟に，「旅」では〝喜〟と〝怒〟に，見られた．また，「友人」は，〝望〟では男＞女で，〝恐〟では女＞男であった．

4 考　　察

(1) 表4および図1は，諸対象に共通な8感情の一般構造には男女の違いがないことを示すが，このことは，〝プラスv.s.マイナス感情〟軸上における8感情の相互関連が，さまざまな対象において全体としては安定したものであることを示し，感情イメージ調査法における8感情の使用の妥当なことを示すものである．

(2) しかし，表5および表6から，対象によっては，8感情の〝プラスv.s.マイナス感情〟軸上の意味（プラスv.s.マイナスの強さ）に男女差のあることが分る．全体として，有意な男女差を示す対象は，〝喜・望・愛〟のプラス感情に多く，〝悲・恐・怒・嫌〟のマイナス感情では相対的に少ない．特に〝嫌〟では1%水準で男女差を示す対象は0であった．対象に対する〝嫌〟の感情は，男女差なく共通して〝強いマイナス感情〟を意味していることがわかる．

(3) しかし，一般に〝強いマイナス感情〟をあらわしている〝悲・恐・怒〟では，いくつかの対象で，男女間に有意な差のあることが示された．すなわち，「文化」に対する〝悲・恐・怒〟の感情イメージは，女では〝強いマイナス感情〟であるのに対し，男では，それほど強いマイナス感情であることを意味しないこと，反対に，「私」に対するこれらの感情イメージは，男の場合には，〝強いマイナス感情を意味するものであった．この関係は，ど強いマイナス感情ではないことである．

また，「父」に対する〝恐〟の感情は，女では，一定程度のマイナス感情を意味するが，男の場合には　マイナス寄りではあっても，明確なマイナス感情をあらわしているものではなかった．このことは，「自然」に対する〝怒〟の感情においても同様であった．

(4) 一般的にはマイナス寄りの中性感情をあらわしている〝驚〟の感情も，いくつかの対象において男女差が見られる．そのうち，最も顕著なものは「文化」に対する〝驚〟の感情イメージである．男にとって，それは，どちらかというと〝プラス感情〟を意味するのに対し，女にとっては，むしろ〝マイナス感情〟を意味するものであった．しかし，「遊び」に対する〝驚〟の感情イメージは，「文化」とは反対に，女にとって〝驚〟の感情はプラス感情であるが，男にとってはマイナス感情を意味するものであった．この関係は，「健康」と「家庭」においても，相対的なものとしてあらわれている．すなわち，男にとって「健康」に対する〝驚〟は，より弱いマイナス感情であるのに対し，「家庭」に対する〝驚〟は，一定のマイナス感情を意味し，女は，この逆である．これらは，〝驚〟の〝プラスv.s.マイナス感情〟軸上での意味が，男女に大きなちがいのあることを示したものである．

(5) 〝プラス感情〟をあらわす〝喜・望・愛〟には，より多くの対象において，男女差が見られている．この3つの感情に共通して男女差の見られる対象は，「文化」「人類」「病気」および「夫」であった．「文化」「人類」「病気」に対する〝喜・望・愛〟の感情イメージは，男では強いプラス感情を意味するのに対し，女では，あまり強いプラス感情を意味しない．反対に，「夫」に対する場合には，これとは逆に，〝喜・望・愛〟の感情

イメージは，女では一定のプラス感情を意味するのに対し，男では，どちらかといえばプラス感情をあらわすにすぎないものであった．

以上から，感情イメージの性による違いについてまとめると，①32対象に共通の一般的感情構造としては，男女に差はなく，感情イメージ調査法で使用している8感情（喜・望・愛・驚・悲・恐・怒・嫌）が男女に共通して妥当するものであること，②大部分の対象において男女の差は小さく有意な差は見られず，特に，〝嫌〟の感情は，男女を問わず，どの対象に対しても〝強いマイナス感情〟を意味していること，③しかし，対象によっては，感情のもつ〝プラスv.s.マイナス感情〟軸上の意味（強度）に有意な男女差が見られるのも事実である．④とくに特徴的なのは〝驚〟の感情で，対象（例えば，「文化」や「遊び」）によっては，男ではプラス感情としての意味になり女ではマイナス感情としての意味になる（または，その逆）場合のあることである．⑤また，「文化」などでは，男では〝喜・望・愛〟のプラス感情に〝プラスv.s.マイナス感情〟軸上の意味を強く負荷し，女では反対に〝悲・恐・怒〟などマイナス感情にその意味を強く負荷することが見られるが，そのように，対象に対する〝プラスv.s.マイナス感情〟を代表（負荷）させるさせ方に，男女差のあることも示唆された．⑥これらは，対象に対する感情イメージとその感情イメージの表出のし方に，男女にさまざまな違いのあること，男女の感情生活にちがいのあることを，当然であるが，示したものである．すなわち，男にとって，「文化」に対する〝驚〟の表明は，決して〝マイナス感情〟の表明ではないのだが，女にとっては，どちらかというと〝マイナス感情〟の表明であり，〝驚〟の感情が，男と女に違った意味を持っているのである．⑦これを，さらに一般化するならば，感情生活の異なるグループ間においては，同じ感情表現であっても，当然，さまざまなニュアンスの違いを持つということが示唆される．本研究で用いた，比較的単純な8感情においても差があるということは，もっと微妙な諸感情においては，さらに差異の大なことが推測される，感情的コミュニケーションにおいて留意されねびならないことであろう．

研究Ⅰにおいて，明らかにしたように，感情における男女差を示す本研究は，8感情による合成得点としての〝感情値〟の算出に当って，対象別に加えて，男女別のウエイトづけの必要性をも示すこととなった．

文　　献

川喜多二郎，発想法，中央公論社，1965.

水島恵一，「体験と意識」研究の方法論，体験と意識に関する総合研究第1集，文教大学人間科学研究会，1～8，1979.

水島恵一，図式的投影法を中心としたイメージ体験研究のレビュー，体験と意識に関する総合研究第2集，文教大学人間科学研究会，105－117，1980.

水島恵一，図式的投影法による総合研究，体験と意識に関する総合研究第3集，文教大学人間科学研究会，142－158，1981.

Plutchik, R., The multifactor - analytic theory of emotion, Journal of Psychol. 50, 153－171, 1960.

上杉喬・佐々木正宏，カード式投影法による感情因子の基礎研究，体験と意識に関する総合研究第1集，文教大学人間科学研究会，14－16，1979a.

上杉喬・佐々木正宏，大学生の意識調査――諸対象に向けられた感情意識（その2）――，日本教育心理学会第21回総会発表論文集，1979b.

上杉喬，「図式的投影法」の総合研究（Ⅱ），カード式投影法の基礎研究，日本教育心理学会第22回総会発表論文集，1980.

上杉喬・水島恵一，図式的投影法による学生の意識研究，体験と意識に関する総合研究第3集，文教大人間科学研究，166－204，1981.

上杉喬，感情イメージの研究，人間科学研究第3号，22－38，1981.

上杉喬，感情イメージの研究（Ⅱ）——労働場面における感情イメージ——，人間科学研究第4号別冊，29－40，1983.
上杉喬，感情イメージの研究（Ⅲ）——，労働場面における感情イメージの諸連関——，人間科学研究第5号，11－20，1984.
上杉喬，感情イメージの研究，日本教育心理学会第28回総会発表論文集，1986.
上杉喬，感情イメージの研究——感情値による検討——，日本教育心理学会第29回総会発表論文集，1987.
上杉喬，感情イメージの研究——感情値とパーソナリティ特性——，日本教育心理学会第30回総会発表論文集，1988.